2. 聖霊のバプテスマを受けたときに、何か感じたり、何か特別なことを体験するのか？

(1) 何もない。
使徒の働きの中には、「異言を語る」という体験が記録されているが、これは聖霊のバプテスマが初めて起きたときに、そのことを使徒たちに明確に理解させるために、聖霊がなさったしるしである。

① 使徒 2：4　「*御霊が語らせるままに、他国のいろいろなことばで話し始めた*」・・・ユダヤ人に聖霊のバプテスマが初めて起きたとき
② 使徒 8：17～18　「*二人が彼らの上に手を置くと、彼らは聖霊を受けた。シモンは、使徒たちが手を置くことで御霊が与えられるのを見て*」・・・聖霊のバプテスマを受けたことをシモンは見ることができた。この箇所では、異言のしるしは特に記されていないが、見ることができたというのは、異言のしるしが起きたと推測される。この箇所は、サマリヤ人に聖霊のバプテスマが初めて起きたときである。
③ 使徒 10：44～46　「*ペテロがなおもこれらのことを話し続けていると、みことばを聞いていたすべての人々に、聖霊が下った。割礼を受けている信者で、ペテロと一緒に来た人たちは、異邦人にも聖霊の賜物が注がれたことに驚いた。彼らが異言を語り、神を賛美するのを聞いたからである。*」・・・異邦人に聖霊のバプテスマが初めて起きたとき。
④ 以上の 3 つのケースは、すべて使徒ペテロがメシアから与えられた権威「*わたしはあなたに天の御国の鍵を与えます*」（マタイ 16：19）に基づいて、ユダヤ人、サマリヤ人（ユダヤ人と異邦人の混血）、そして異邦人に、「奥義としての神の国」に入る門を開いた出来事である。この 3 回で、すべての人類に向けて門は開かれた。その後は、聖霊のバプテスマに異言のしるしが伴うことは全くない。

(2) 信じたときに、すべての信者が聖霊のバプテスマを受けている。
Ⅰコリ 12：13　*私たちはみな、ユダヤ人もギリシア人も、奴隷も自由人も、一つの御霊によってバプテスマを受けて、一つのからだとなりました。そして、みな一つの御霊を飲んだのです。*

(3) 信者一人ひとりにとって、それは信じたときに 1 回限り起きたことである。あらためて「聖霊のバプテスマを受けなさい」と命じる箇所や、勧めるような聖書箇所は、全くない。

3. 聖霊のバプテスマは、教会時代に特有なものである。教会時代より前の、旧約や福音書の時代には、まだない。また、教会時代の後、大患難期やメシアの王国（千年王国）においては、もはやない。

(1) メシアは復活してから 40 日間にわたって弟子たちに現れ、神の国のことを語られて、昇天した。それから 10 日後、聖霊が弟子たちに下った。

① その出来事が、使徒の働き 2 章 に記録されている。ユダヤ人信者たちに初めて聖霊のバプテスマが起きたときのことである。

② このときから、教会がスタートした。聖霊のバプテスマは、教会を生み出した。

(2) よって、教会がスタートする前の時期である、福音書においては、聖霊のバプテスマは、まだ起きていない。福音書と使徒 1 章までの時期においては、だれ一人、聖霊のバプテスマを受けた人は、いない。聖霊のバプテスマについて語られる箇所では、常に、将来起きることとして、語られている。

① 先駆者ヨハネによる証言

- マタイ 3：11 「*その方は聖霊と火であなたがたにバプテスマを授けられます。*」
- マルコ 1：8 「*私はあなたがたに水でバプテスマを授けましたが、この方は聖霊によってバプテスマをお授けになります。*」
- ルカ 3：16 「*その方は聖霊と火で、あなたがたにバプテスマを授けられます*」
- ヨハネ 1：33～34 「*私自身もこの方を知りませんでした。しかし、水でバプテスマを授けるようにと私を遣わした方が、私に言われました。『御霊が、ある人の上にとどまるのをあなたが見たら、その人こそ、聖霊によってバプテスマを授ける者である。』私はそれを見ました。それでこの方が、神の子であると証しをしているのです。*」

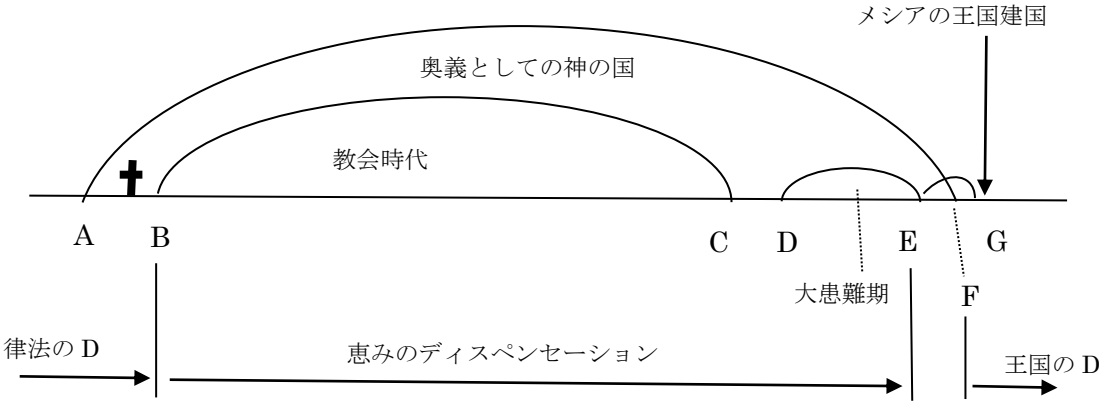
② イエスによる命令

- 使徒 1：5 「*エルサレムを離れないで、わたしから聞いた父の約束を待ちなさい。ヨハネは水でバプテスマを授けましたが、あなたがたは間もなく、聖霊によるバプテスマを授けられるからです。*」

③ この約束の成就が 使徒の働き 2 章 である。

(3) 聖霊のバプテスマによって、ユダヤ人と異邦人がひとつのからだ、教会とされる。その前提は、ユダヤ人と異邦人を隔てていた、モーセの律法が廃棄されることであり、それはキリストの十字架によって実現した。（エペソ 2：11～18）。

(4) 聖霊のバプテスマは、信者を普遍的教会につなげる働きであるから、教会が完成し、教会が天に携挙されれば、その働きは終わる。よって、教会が携挙された後、大患難期において信じて信者となった人たち、そして、メシアの王国（千年王国）において信じて信者となった人たちには、聖霊のバプテスマは、ない。

□補足　「奥義としての神の国」と「教会時代」との時間的関係

1. 「奥義としての神の国」は、イスラエルの指導者層がイエスをメシアではないと拒否したとき（マタイ 12 章）【A】から始まり、諸国民の裁き（マタイ 25 章）【F】で終わる。この期間の中に、教会時代と大患難期が含まれる。
2. 聖霊のバプテスマは、紀元 30 年五旬節の日に起きて、教会を誕生させ【B】、教会時代をスタートさせた。教会時代は、教会の携挙【C】をもって終了する。
   教会の携挙とは、教会の信者たちの復活と変換、そして天への携挙である。教会の携挙のあと、地上は、大患難期 7 年間を迎える。
3. 大患難期は、国家としてのイスラエルと、ある小国の君主反キリストとの同盟条約締結【D】をもって始まる。そして最後は、イスラエル民族の悔い改め・メシア受容・キリストの再臨、そして反キリストとその軍隊の壊滅【E】をもって、大患難期は終了する。
4. 大患難期終了【E】後、メシアの王国の建国【G】までに 75 日間の準備期間がある。この期間に起きる出来事のひとつが、諸国民の裁き【F】である。大患難期を生き残った諸国民が、正しい者と悪い者とに区分され、正しい者はメシアの王国に入ることを認められるという裁きである。これをもって、奥義としての神の国は終了する。